

沖縄本島と石垣島 琉球近世瓦の展開 : 琉球
近世瓦の研究

石井, 龍太

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

34

(開始ページ / Start Page)

181

(終了ページ / End Page)

215

(発行年 / Year)

2008-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007254>

沖繩本島と石垣島 琉球近世瓦の展開

— 琉球近世瓦の研究 —

石井 龍太

はじめに

日本列島を含めた東アジア、東南アジアで中世・近世の都市に関わる遺跡を発掘すれば、多くの場合莫大な数量の瓦に出くわすことになる。沖繩においても同様で、特に那覇市を始めとする沖繩本島南部の遺跡からは近世に位置付けられる莫大な数量の瓦が出土する。収蔵庫に入れば堆く積み上げられた瓦のコンテナにしばしば圧倒される。驚くべき生産量、そして軒瓦の多様な瓦当紋様を見れば、近世期の琉球王国が瓦にかけた労力が如何に甚大なものであったか推し量れる。一方で時に瓦の使用は限定され、統制されていたことが知られている。琉球近世期の瓦は琉球王国近世の社会、窯業史を

読み解く手がかりを秘めているはずである。

本稿の目的は、近世における沖繩本島と石垣島の関わり方を探る手掛かりとして、琉球近世瓦の分析を通じ両島の間で行われた窯業技術の交流と展開の一端を明らかにすることにある。文献から両島の窯業史上の関わりについて述べた先行研究はあったが、本稿のように考古学的手法を用い物質文化の側面から行われた研究は少ない。関連諸領域が互いの成果をつき合わせ、批判的比較検討を行うことでより多角的で精緻な分析が可能になると考える。

先行研究

瓦研究の意義

一般に瓦を生産するには特殊な設備と技術、莫大な資源を必要とする。そして時には一つの建物に何万枚も葺かれることから、瓦葺きの建物は瓦の総重量に耐えられるだけの頑丈な建物構造を必要とする。また瓦当などの装飾的要素は文化的、政治的立場を体现する。つまり権力者は瓦を生産し使用することで自分の力を内外に示し、また自らの文化的、政治的立場を表象することが出来る。瓦は屋根の上にはいわば展示される威信財の側面を持つものだと見える。琉球近世瓦の研究は、瓦を用いる琉球王国の社会の力、さらに文化的、政治的側面の解明に有効であると期待出来るのである。

一方で瓦は、屋根を覆って建築物を堅牢にする建築材の側面も持つ。特に近世では火災時の延焼防止のために瓦の使用拡大に努めた例が琉球にも江戸にも見られる。琉球近世瓦の研究は琉球王国近世期の耐火建築材の研究でもあり、琉球王国近世の防災、都市計画の解明に有効であると期待出来るのである。この点については何れ稿を改め論じるつもりである。そして瓦が一部の建築物、一部の階層に独占される時、前述の威信財的側面は耐火建築材の独占の意味も合わさってさらに強められると考えられる。支配者の建築物だけは見栄えよくしかも燃えにくいとしたら、被支配者は自ずと羨望の眼差しを向けるようになるだろう。

文献から見た琉球近世瓦

沖繩本島

筆者は沖繩本島の琉球近世瓦に関する文献史料を集成し考察したことがある（石井二〇〇六a）。詳細はそちらを一読願うことにして、ここでは本稿と関わる部分を抜き出して要約する。まず琉球近世瓦に関わる可能性のある古手の記述は一五三四年の『使琉球記』の記事に求められ、冊封使はわずかながら瓦葺きの建築があるとしているが、琉球王国には近世以前に別種の瓦が存在している。数百年にも及ぶ瓦の耐久年数を考えると、この時期に瓦が生産されていなくともまだ使用されている可能

性は残り、記事が果たして琉球近世瓦を指すのかどうか疑問が残る。『使琉球記』から半世紀近く経った後、『汪代家譜』一五七九年の記事には「汪永沢（小橋川孝韻）瓦奉行となる」とあり、生産を司る役職が存在する以上一六世紀後半にはすでに近世瓦の生産が行われていたと推察される。そして生産開始はさらに古くなると推察される。実際同年の『使琉球記』には富裕貴族層が瓦を使用しているとある。冊封使は王国中検分したわけではなく限られた範囲の移動に留まっていたが、彼らの移動範囲には現在確認される琉球近世瓦を出土する遺跡が多く入ることから、記事はそれら諸施設およびその近辺の状況と考えられる。「滴水、筒版瓦」という記載はおそらく軒瓦も意味しているものと捉えられ、この時点で目に付くほど普及していることが分かる。その後、板葺きだった首里城正殿は一六七〇年に瓦葺きとなる。一七世紀末から一八世紀初頭の史料には本島各地の建築物が次々と瓦葺きにされる記述があり、需要に対応して増産はピークを迎えたと考えられる。この時期の瓦葺きの目的は何だろうか。一六九七年には蔵を瓦葺にせよという令達が出され、目的は防火の可能性がある。先に取り上げた首里城正殿の瓦葺きの記述には「壮麗鞏固となす」という表現が見られ、正殿への瓦の採用は美観の側面だけでなく一七世紀後半には既に防災の側面も目的としていた可能性がある。しかし一八世紀前半には新たな瓦葺きの記事は減り、やがて平民の瓦葺きが禁じられる。瓦は権力者の建築物だけに許される威信財としての側面が強くなったと考えられる。一方で修理の必要から生産は一定量を維持したであろう。

琉球近世瓦の生産について史料を基にもう少し詳しく見てみよう。上述の『汪代家譜』一五七九年の記事には瓦奉行が設置されているとあり、生産開始は一六世紀後半以前ということになる。『琉球由來記』には渡嘉敷三良という渡来人が真玉橋で瓦を焼いた記事がある。焼き始めの年代は不明だが生産を司る瓦奉行の設置より先立つかもしれない。しかし断言には至らない。琉球近世瓦の生産開始期は不明といわざるを得ない。それから一世紀ほど経った一六八二年、『球陽』に美里郡知花邑、首里宝口、那覇湧田の陶窯を牧志に統合するとある。本島内の複数の生産地が牧志一つに纏められ、これが壺屋の基になると解釈されている。もう一つ、作成年代を巡って今だ議論のある『首里古地図』には首里の鳥堀に瓦窯が記載されている。以上のように文献に表れる瓦生産地は少なくないが、しかし現在のところ確認された瓦の生産遺跡は湧田古窯跡、鳥堀古瓦窯跡、そして読谷村の喜名焼古窯だけで、真玉橋をはじめ、知花、宝口でも瓦生産遺跡は確認されていない。また喜名焼古窯は未報告であるため触れるのは避けよう。現在琉球近世瓦の資料を直接調査することが出来、網羅的研究が出来るのは那覇の湧田古窯跡に限られるといつてよい。

石垣島

石垣島の近世瓦は何処で生産されていたのだろうか。近世の石垣島では多くの窯が操業されていたことが知られている。現在遺跡として確認される窯跡は名蔵窯跡、阿香花窯跡、黒石川窯跡、高山壺屋窯跡、平田窯跡の五遺跡である。このうち阿香花窯跡からは瓦が報告されていない。

文献に現れる窯の数が実際に確認される遺跡の数より多いため、何人もの研究者が文献と遺跡との対応関係について論じてきた。石垣島の窯に関する過去の文献の検証は、窯の同定と移転に重点が置かれてきたといつてよい。詳細は既に述べたことがある（石井二〇〇七a）ので省くが、黒石川窯の発掘担当者でもあった阿利直治氏の研究が現在に至るも決定版となっている（阿利一九九二）。阿利氏は一六九五年に初めて石垣島に築かれた名蔵窯と阿香花窯が黒石川窯に移転する、という二つだった窯が一つになるという説を提示している。ただ阿利氏の論考にも問題点は存在し、移転先の慶田川が黒石川のことを指すというのが重要な点であるが、根拠は同じ年に移転の請願が出たということのみである。地名の問題は残り、複数の呼称があったのなら説明が必要である。阿利氏は山田平等と阿香花窯の同定には地名を引きながら、慶田川と黒石川については言及していない。ただ両者を否定する史料も肯定する史料も存在しないのが実情である。

文献史料からは、沖縄本島の瓦生産技術が技術者の招致により石垣島の名蔵窯に伝播し、さらに名蔵窯は黒石川窯へ統合されるという過程を追うことが出来る。ならば一七世紀後半における沖縄本島の瓦窯と名蔵窯とで瓦生産技術が共通するはずであり、また一八世紀前半における名蔵窯と黒石川窯とでやはり生産技術が共通するはずである。以上の観点から考古資料を分析してみよう。なお上述した三つの窯跡の地理的位置関係は図1のようになる（図1）。何れも消費地に近い南西部に築かれた

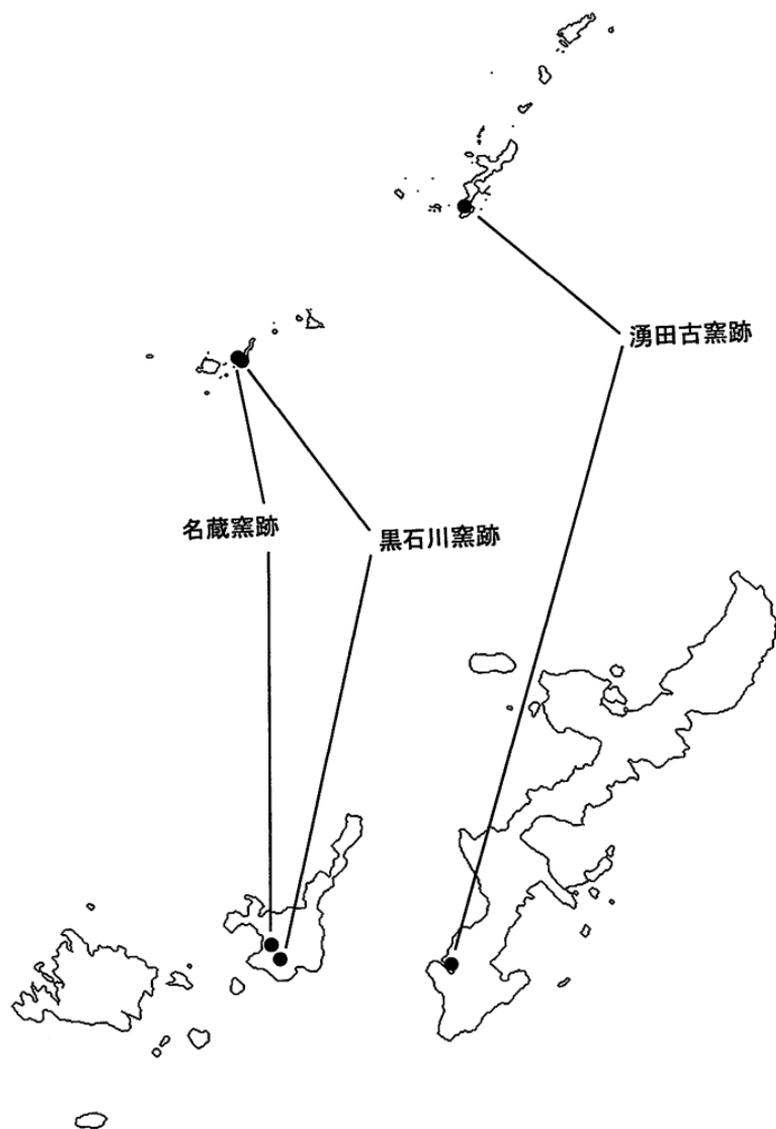
のが見て取れよう。

琉球近世瓦の考古学的検証

先行研究

琉球近世瓦を考古学的手法で研究した極初期のものには鎌倉芳太郎氏によるものがあり（鎌倉一九七六）、また大川清氏による中世、近世共々網羅的に扱ったものもあった（大川一九六二）。しかし琉球近世瓦を専ら取り上げその全体像を明らかにしたのは上原静氏の一連の論考である（上原一九九四他）。上原氏の研究は瓦の形態の分析から瓦当紋様の集成、分析まで多岐にわたり、琉球近世瓦の研究枠組みを作り上げている。筆者は上原氏をはじめとする先行研究を受け、新出の考古資料を盛り込んで新たな分析・研究を行った。筆者は先ず沖縄本島の琉球近世瓦に関する文献資料を集成し考察を加えた（石井二〇〇六a）。そして考古資料の分析にあたって呼称を整理し、資料の集成と新たな視点からの分類を試みた（石井二〇〇六b、c）。そして得られた成果を演繹して湧田古窯跡出土琉球近世瓦を分析し、分析を通じて瓦生産施設としての湧田古窯の再評価を試みた（石井二〇〇七c）。

考古学の方面から石垣島の近世瓦について過去述べたものとしては、各遺跡の発掘報告書を除けば



【図1】

上原静氏の論考（上原二〇〇五）があるだけだった。上原氏の論考では既に両島の技術交流についての指摘があり注目される。上原氏は「八重山諸島に伝播した造瓦技術は、那覇所在の湧田系造瓦技術に系譜を有するものである」としているが、その論考の中で根拠となる具体的な造瓦技術には言及していなかった。筆者は将来の比較研究を念頭に置き、石垣島に分布する琉球近世瓦についても沖縄本島の資料の分析と同じ手法を用い、先ず関連する文献史料を集成して考察を加え（石井二〇〇七a）、さらに特徴的な軒瓦を集成、分類した（石井二〇〇七b）。

以下、これまでの成果を総合し、沖縄本島と石垣島でそれぞれ見られる琉球近世瓦を比較して両地域の間で行われた技術交流と展開を明らかにしていきたい。両島の造瓦技術には共通点も相違点もある。両方をどのように評価していくべきかを以下論じていくこととする。

沖縄本島の琉球近世瓦

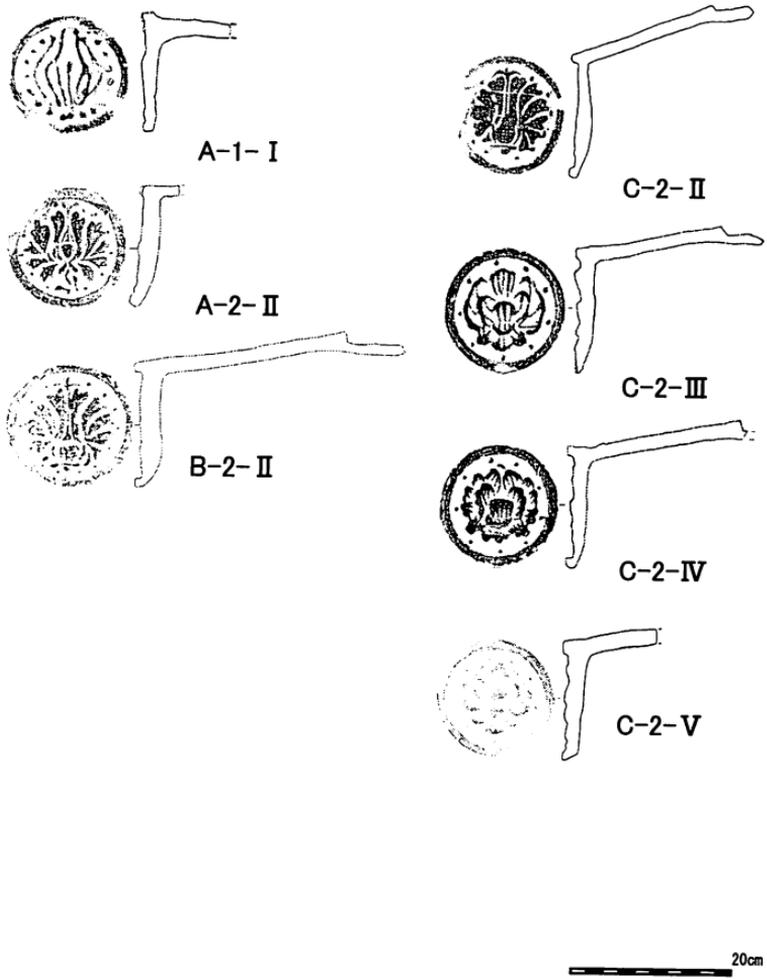
筆者はかつて、沖縄県各地で出土する琉球近世瓦の内、軒瓦の資料を集成し分析を加えるなかで、瓦の形態や生産の過程で残される痕跡を観察し、二種類の特徴を抽出した（石井二〇〇六b、c）。一つは軒瓦の瓦当の角度、瓦当の厚みといった屋根上での葺き方に関わると考えられる「葺き方に関する特徴」である。葺き方に関わる以上、この特徴が異なる瓦同士は原則として同じ軒先に使用することは出来ない。もう一つは製作道具の材質、整形の方法といった瓦の生産に携わった職人たちの流

儀が反映された「流儀に関する特徴」である。葺き方に影響する形態上の特徴ではないため建築現場で問題になるものではないが、生産に関わる造瓦集団を考える際には大きな手掛かりとなり得る。以上二種類の特徴に加え、さらに瓦当に用いられた紋様を集成、分析した。琉球近世瓦の瓦当紋様は、過半数が牡丹紋様に占められている。筆者は子房、花卉、葉といった要素を分析し、これら牡丹紋様が大きく五種類に分類出来ることを明らかにした。「葺き方に関する特徴」、「流儀に関する特徴」、「瓦当紋様」はそれぞれ瓦の設計、瓦の製作、瓦のデザインと読み替えることも出来る。

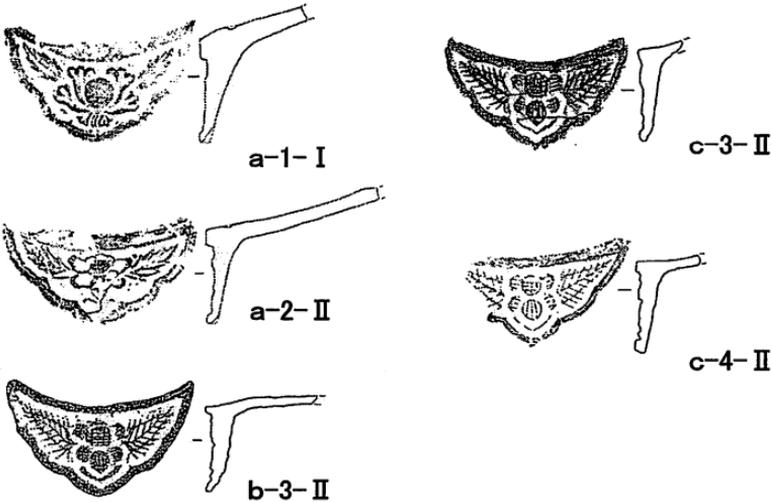
以上の二つの特徴と瓦当紋様の組み合わせを検討した結果、以下に示すように軒丸瓦を七種、軒平瓦を五種に分類することが出来た(図2、3)。

軒丸瓦..

瓦当接合角度直角・灰褐―陶范・范バリ未整形―牡丹紋様 I .. A―1―I
 瓦当接合角度直角・灰褐―木范・范バリを整形―牡丹紋様 II .. A―2―II
 瓦当接合角度鈍角・灰褐―木范・范バリを整形―牡丹紋様 II .. B―2―II
 瓦当接合角度鈍角・赤色―木范・范バリを整形―牡丹紋様 II .. C―2―II
 瓦当接合角度鈍角・赤色―木范・范バリを整形―牡丹紋様 III .. C―2―III
 瓦当接合角度鈍角・赤色―木范・范バリを整形―牡丹紋様 IV .. C―2―IV
 瓦当接合角度鈍角・赤色―木范・范バリを整形―牡丹紋様 V .. C―2―V



[図 2]



[图 3]

軒平瓦…

内面接合粘土厚・灰褐—陶范・范バリ未整形・瓦当裏ナデ斜—牡丹紋様 I… a—1—I
 内面接合粘土厚・灰褐—木范・范バリ整形①・瓦当裏ナデ斜—牡丹紋様 II… a—2—II
 内面接合粘土薄・灰褐—木范・范バリ整形①・瓦当裏ナデ横—牡丹紋様 II… b—3—II
 内面接合粘土薄・赤色—木范・范バリ整形①・瓦当裏ナデ横—牡丹紋様 II… c—3—II
 内面接合粘土薄・赤色—木范・范バリ整形②・瓦当裏ナデ横—牡丹紋様 II… c—4—II
 この他黒塗の C、c が存在し、必要に応じこれを C—b、c—b という記号で示す。また彩色の無い C、c は C—r、c—r で示す。

上述の分類に加え、牡丹紋様を手掛かりとしたさらに細かい分類も可能である。紋様が施される瓦当は、瓦当范と呼ばれる紋様を彫り込んだ型に粘土を詰めて製作される。瓦当范の傷やゆがみはそのまま製品に転写されるため、似た紋様でも紋様部の表面を細かく観察することで使用された瓦当范の違いを判断することが出来る。現在までの発掘の成果により、軒丸瓦で八五種、軒平瓦で五九種、総計一四四種の瓦当范が確認されている。そのうち軒丸瓦五七種、軒平瓦五〇種が牡丹紋様である。上述の分類に加え、さらに同じ種類の牡丹紋様の中でも瓦当范毎に厳密に細分することでより細かい分類も可能である。

資料を述べる際に一々特徴を列挙するのは煩雑であるため、以下上述した記号の組み合わせで軒瓦資料を呼称することにする。また既に筆者は上述の一四四種の瓦当范それぞれに発掘された遺跡名とアルファベットの組み合わせで呼称を与えた(石井二〇〇六b)。瓦当范の違いにも留意する際はこの呼称も合わせて用いることとする。

湧田古窯跡出土琉球近世瓦

那覇市久茂地の県庁建設時、建設予定地から近世に位置付けられる窯業施設跡が発見され、大規模な発掘調査が行われた。この窯業施設は文献で知られる湧田古窯と考えられ、出土した遺物の多くを瓦が占めていたことから調査された範囲は瓦生産地区と考えられた。瓦のみならず、さらに特殊な形態の窯跡をはじめ、瓦当范など特殊な資料が多数得られたが、しかし豊富な内容と規模を持った本遺跡の調査研究は、発掘当初に若干問題提起されたに留まり、現在に至るまで低調である。筆者は上述の分類を適応し、発掘された湧田古窯跡出土の琉球近世瓦を対象に製作技法と紋様を分析、さらに個々の資料の出土地点、出土層位、出土比率といった点からも考察を加え、湧田古窯の既存の評価を再検討したことがある(石井二〇〇七c、投稿中)。結論は多岐に渡るが、本稿の課題である石垣島の諸窯との比較に関わる部分を抜き出しその要点を述べると次のようになる。

- ・ 湧田古窯跡出土の軒丸瓦は、上述の特徴の組み合わせのうちA-1-I、A-2-II、B-2-I

IIの三種に限られる(石井二〇〇七c)。

- 瓦当紋様から見たとき、これら三種に分類される軒丸瓦は沖縄本島全体で多種あるが、瓦当範囲に見るとその殆ど全てが湧田古窯跡で確認される。すなわち湧田古窯では、これら三種の軒瓦は全ての独占的生産が行われていたと推察される。また牡丹紋様以外の瓦当紋様を有するもの、完形資料の不足から上記の分類に分けられなかったものもほとんど全ての種類が確認される(石井二〇〇七c)。

- 湧田古窯跡出土の軒平瓦は、上述の特徴の組み合わせのうち a—1—I、a—2—IIに限られる(石井投稿中)。

- 瓦当紋様から見たとき、これら二種に分類される軒平瓦は多種あるが、軒丸瓦と同じくやはり殆ど全てが湧田古窯跡で確認される。すなわち湧田古窯では、これら二種ほぼ全ての独占的生産が行われていたと推察される。また牡丹紋様以外の瓦当紋様を有するものもほとんど全ての種類が確認される(石井投稿中)。

- 一方、上述した軒丸瓦三種、軒平瓦二種に属しながら、瓦当範囲で見たとき現時点で湧田古窯跡から出土が確認されないものも存在する。より広範囲の発掘が行われれば出土する可能性もあるが、これら出土の見られない資料は湧田古窯では生産されていなかった可能性もある。型式学的分析から、出土が確認されない瓦当紋様は三種の中でも後出に位置付けられると考えられる。すなわ

ち上述の三種に属しながら、湧田古窯が閉窯されて後に生産された種類がありうる（石井二〇〇七c、投稿中）。

出土点数もさることながら、さらに出土種類数の多さは、湧田古窯が琉球王国近世期の瓦生産において中心的位置を占めていたことを物語る。

石垣島の琉球近世瓦

筆者はかつて石垣島出土の琉球近世瓦を集成し、沖縄本島の資料と同じ手法で分類を試みたことがある（石井二〇〇七b）。全形の確認出来る完形資料が乏しかったため分類不能なものもあったが、結果以下の通りである。なお前の論考では設定しなかった軒平瓦の分類2種（a—6—II、c—5—II）を今回新たに追加する。

軒丸瓦

- ・瓦当接合角度鈍角・赤色—木范・范バリを整形—牡丹紋様II…C—2—II
- ・瓦当接合角度不詳・灰褐—木范・范バリを整形—牡丹紋様II…?—g—2—II
- ・瓦当接合角度不詳・赤色—木范・范バリを整形—牡丹紋様II…?—r—2—II
- ・瓦当接合角度鋭角・赤色—木范・范バリを整形—牡丹紋様以外

軒平瓦

- ・内面接合粘土厚・灰褐―木範・範バリ整形①・瓦当裏ナデ斜―牡丹紋様Ⅱ… a―2―Ⅱ
- ・内面接合粘土厚・灰褐―木範・範バリ整形①・瓦当裏ナデ縦―牡丹紋様Ⅱ… a―6―Ⅱ
- ・内面接合粘土薄・赤色―木範・範バリ整形①・瓦当裏ナデ斜―牡丹紋様Ⅱ… c―2―Ⅱ
- ・内面接合粘土薄・赤色―木範・範バリ整形①・瓦当裏ナデ横―牡丹紋様Ⅱ… c―5―Ⅱ
- ・内面接合粘土薄・赤色―木範・範バリ整形①・瓦当裏ナデ縦―牡丹紋様Ⅱ… c―6―Ⅱ

※ 「?g」、「?r」は葺き方に関する特徴のうち色調のみが判断出来ることを示す記号として用いる。「?g」は灰・褐色系、「?r」は赤色系に属する。

本島の資料と同様に、牡丹紋様はさらに細分可能である。また分類には反映されていないが、石垣島で確認される琉球近世瓦全般に言えることとして、胎土に白色鉱物が多く混入していること、色調が赤色系の場合沖繩本島の資料に比べて黒味がかかった赤色を呈すること、焼成に失敗し自然釉を吹いた資料が漆喰の付いた状態で確認され、そうした製品でも屋根に葺かれたと推察されること、が挙げられる。

上述した通り、近世の石垣島には四つの瓦窯が操業されていた。本稿では対象を名蔵窯跡、黒石川

窯跡に絞り、順に資料を分析して沖縄本島の資料との比較を試みることにする。

名蔵窯跡と軒瓦

名蔵窯跡は石垣市教育委員会によって発掘調査が行われた。発掘報告書は現在のところ刊行されていないためその詳細な内容は不明だが、一部の情報は開示され概要を知ることが出来る。また表採資料が石垣市立八重山博物館に収蔵されている。

名蔵窯跡で検出された窯の構造は湧田古窯跡で発掘された平窯の構造と良く類似するという（池田二〇〇三）。また現地説明会のパンフレットから筆者がかつて軒丸瓦蔵元A、軒平瓦蔵元Aと呼称を与えたものと同じ軒瓦が出土していることが知れる。両種とも呼称の示す通り蔵元跡から出土しており、名蔵窯の供給先を示唆している。またこの二種は上述した石垣島の窯跡のうち名蔵窯からしか確認されていないことから、名蔵窯でのみ生産されたものと考えられ、蔵元跡遺跡出土資料ではあるがその分析は名蔵窯の瓦生産技術の分析に繋がる。また全形が不明であるため断言出来ないが、軒丸瓦黒石川Aらしき瓦当紋様も出土している。事実なら名蔵窯と黒石川窯の結びつきを示唆する資料といえる。なお軒平瓦蔵元Aは名蔵窯跡で表採された資料も確認される。合わせて分析対象とすることにしよう。

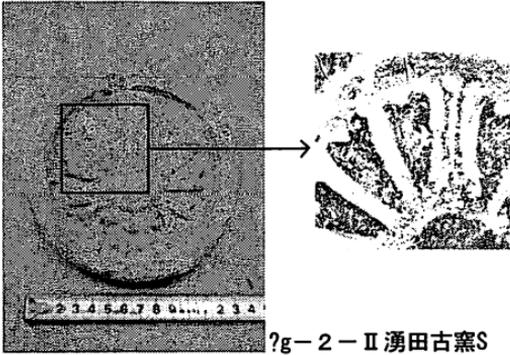
軒丸瓦 (図4)

蔵元跡遺跡から出土した軒丸瓦蔵元Aは丸瓦部が欠損しており、瓦当接合角度は不詳である。色調は灰・褐色系に分類される。瓦当面の観察から木范を用いたものと考えられ、瓦当周縁はなでつけて整形されている。瓦当紋様は牡丹紋様で周りを珠文が巡り、子房、雌しべの特徴が沖縄本島の資料に最も近い。中でも雌しべに注目すべき大きな特徴があり、根元から二つに分かれる。本島の分類と照らした時蔵元Aの瓦当紋様は牡丹紋様IIに属すると考えられる。以上の諸特徴の組み合わせから蔵元跡遺跡出土の軒丸瓦蔵元Aは? g-2-IIに分類される。

軒平瓦 (図5)

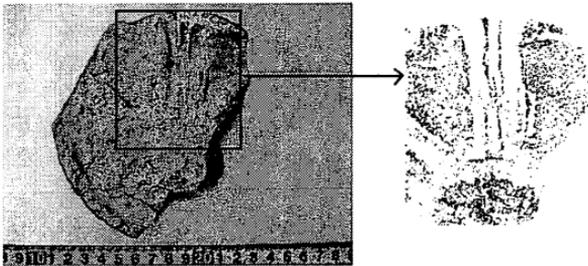
軒平瓦蔵元Aは内面接合粘土が厚く、色調は灰・褐色系に分類される。瓦当面の観察から木范を用いたものと考えられ、瓦当周縁はナデ整形が不徹底である。瓦当裏は左上がりの斜めナデが施される。瓦当紋様は牡丹紋様で子房の上端が平坦な点で特徴的である。本島の分類のうち牡丹紋様IIに属すると考えられる。以上の諸特徴の組み合わせから蔵元跡遺跡出土の軒平瓦蔵元Aはa-2-IIに分類される。一方名蔵窯跡で表採された資料は瓦当裏に縦ナデが施される点で相違点もある。この表採資料はa-6-IIに分類される。

— 沖縄本島 —



?g-2-II 湧田古窯S

— 名蔵窯? —



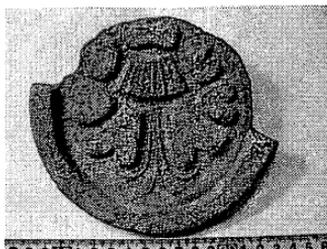
?g-2-II 蔵元A



?r-2-II 黒石川A?

[図4-1]

黒石川窯



?r-2-II 黒石川A



?r-2-II 黒石川B

[図4-2]

沖縄本島

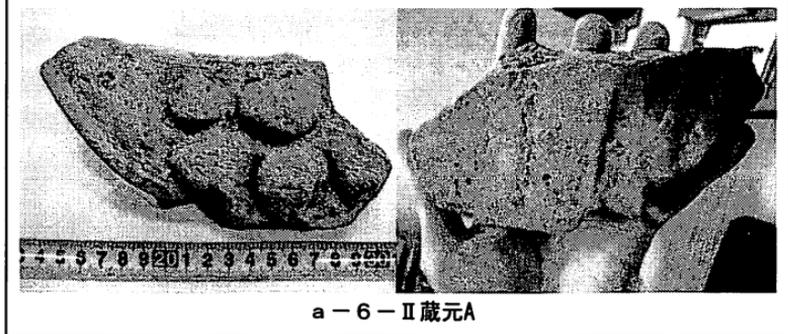


a-2-II 崇元寺A

名蔵窯?



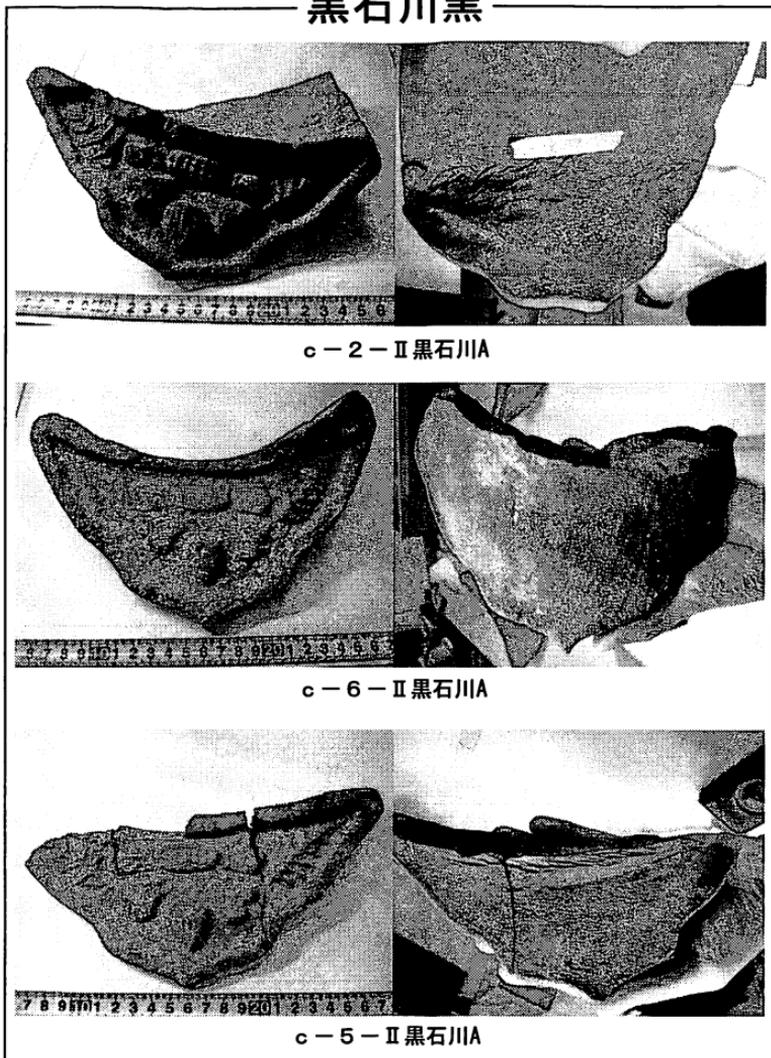
a-2-II 蔵元A



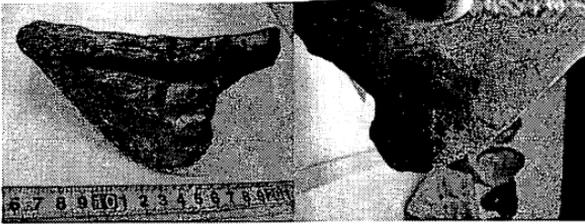
a-6-II 蔵元A

[図5-1]

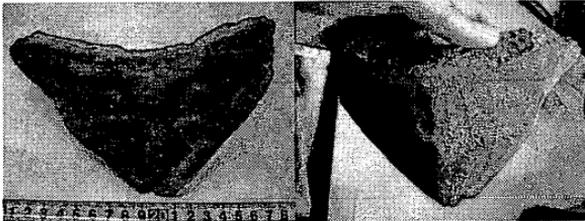
黒石川窯



[図 5 - 2]



内面接合粘土薄・赤色一木範・範バリ整形①・瓦当裏ナデ縦一牡丹紋様Ⅱ
c-6-II 蔵元B



内面接合粘土薄・赤色一木範・範バリ整形①・瓦当裏ナデ縦一牡丹紋様Ⅱ
c-6-II 桃林寺①



内面接合粘土薄・赤色一木範・範バリ整形①・瓦当裏ナデ縦一牡丹紋様以外
黒石川



内面接合粘土薄・赤色一木範・範バリ整形①・瓦当裏ナデ縦一牡丹紋様以外
蔵元C

黒石川窯跡と出土軒瓦

黒石川窯跡は石垣市教育委員会によって発掘調査が行われた。既に精緻な報告書が刊行されており、遺物の実見も可能な状態にある。同じ石垣島に築かれた窯でありながら、出土する軒瓦の特徴は前述の資料とは相違点も見受けられる。軒丸瓦は黒石川A、黒石川Bが、軒平瓦は黒石川A、黒石川Bが確認されている。

軒丸瓦 (図4)

軒丸瓦黒石川Aは何れの資料も丸瓦部が欠損しており瓦当接合角度は不詳である。色調は赤色系に分類される。瓦当面の観察から木範を用いたものと考えられ、瓦当周縁はなでつけて整形されている。瓦当紋様は牡丹紋様Ⅱに属すると考えられるが、湧田古窯に見られる牡丹紋様Ⅱを上下逆に接合するという特異性を持つ。以上の諸特徴の組み合わせから軒丸瓦黒石川Aは？ r-2-Ⅱに分類される。軒丸瓦黒石川Bも同様の諸特徴の組み合わせが確認され、やはり？ r-2-Ⅱに分類される。

軒平瓦 (図5、6)

軒平瓦黒石川Aは内面接合粘土が薄く、色調は赤色系に分類される。瓦当面の観察から木範を用いたものと考えられ、瓦当周縁はナデ整形が不徹底である。瓦当裏は縦ナデが施される。以上の諸特徴の組み合わせから軒平瓦黒石川Aはc-6-Ⅱに分類される。一方若干数だが瓦当裏に斜めナデや横ナデが施される資料もある。これらはそれぞれc-2-Ⅱ、c-5-Ⅱに分類される。但し横ナデは

沖繩本島に見られるような深い指跡を残すものではなく、表面を平滑にする程度のナデに留まる（図5）。

軒平瓦黒石川Bは瓦当紋様が幾何学的な紋様で、牡丹紋様とはしがたい。内面接合粘土が薄く、色調は赤色系に分類される。瓦当面に紋様と無関係に走る並行する凸線が認められることから木范を用いたものと考えられ、瓦当周縁はナデ整形が不徹底である。瓦当裏は様々な方向のナデが重なり特定方向に分類し難い。但し「桃林寺」と注記された八重山博物館所蔵の資料は縦ナデが施される（図6）。現時点では類例が乏しく何れが主体となるか判然としない。

考察 琉球近世瓦の展開

名蔵窯で生産されたと推察される軒丸瓦蔵元Aは子房、珠文、雌しへの特徴が沖繩本島の資料に最も近い。中でも雌しべに注目すべき大きな特徴があり、根元から二つに分かれる。沖繩本島の資料では軒丸瓦湧田古窯Sのみが同じ特徴を有する。但し紋様の構成要素は減り湧田古窯Sより簡素である。軒丸瓦蔵元Aの瓦当と丸瓦部の接合角度は判然としないが、色調は灰・褐色系を呈し、瓦当范は木製で、范バリが整形されるといった蔵元Aの特徴は瓦当紋様以外も湧田古窯Sと共通する（図4）。

名蔵窯で生産されたと推察される軒平瓦蔵元Aの子房は上端が平坦な点で特徴的である。沖繩本島

の牡丹紋様Ⅱの中で、軒平瓦崇元寺Aが同じ特徴を有している。但し軒丸瓦と同じく紋様の構成要素は減り崇元寺Aより簡素である。その他の点については、范バリの整形が徹底せず、色調が灰・褐色を呈し、瓦当范は木製で、瓦当裏の調整は斜めナデが卓越するといった諸特徴の組み合わせはa-2-Ⅱに分類され、本島に類例を求めることが出来る。軒平瓦崇元寺Aは同じa-2-Ⅱに分類される。但し名蔵窯表採の軒平瓦には瓦当裏の調整が縦ナデに分類される資料もあり、黒石川窯跡出土資料と共通するのは注目すべきといえる(図5)。

黒石川窯の軒丸瓦には沖縄本島出土資料と異なる特徴が見出せる。軒丸瓦黒石川A、黒石川Bはr-2-Ⅱに分類される。流儀に関する特徴は湧田古窯跡や蔵元跡の資料とも共通するが、葺き方に関する特徴のうち色調が明らかに異なる。また瓦当紋様は湧田古窯跡出土資料に見られる牡丹紋様Ⅱを逆転させた紋様が用いられるのは、湧田古窯跡の資料との明瞭な相違点といえる(図4)。逆転が何時、何故生じたのかは不明である。名蔵窯跡の報告がなされた時点で明らかになることを期待したい。この相違点は軒丸瓦蔵元Aには必ずしも言えないことだが、名蔵窯跡から赤色系の軒丸瓦黒石川Aとみられる資料が出土しているのは注目しておきたい(石垣市教育委員会二〇〇二)。

黒石川窯の軒平瓦黒石川Aはc-6-Ⅱを主体とし、色調は赤色系で内面接合粘土は薄い。瓦当裏のナデ方向は縦ナデが主体となる。葺き方に関する特徴、流儀に関する特徴ともに湧田古窯跡の資料とは相違点が認められる。これら相違点は同時に蔵元跡の軒平瓦との相違点でもあるが、名蔵窯跡表

採資料は a—6—II、黒石川窯跡出土資料には c—2—II があり、流儀に関する特徴が一部共通する資料もあるのは興味深い。他の窯に類例が見られない c—5—II も黒石川窯の特異性を表しているとして評価出来るかもしれない。

以上述べたように、沖縄本島・石垣島の軒瓦は同じ分類で括れるものとそうでないものがある。同じ分類に属するものは、同じ設計、同じ製作の流儀、同じデザインで製作されたものと考えられる。窯別に細かく言えば、推定名蔵窯の軒瓦と、湧田古窯の終末期から閉窯後に位置付けられる軒瓦とが同じ設計、同じ製作、同じデザインであると考えられる。黒石川窯跡の軒瓦は沖縄本島の軒瓦とは異なる特徴を有している。両者は疎遠な関係にあり、直接結びつけることは出来ないと考えられる。一方名蔵窯表採の軒瓦と黒石川窯の軒瓦とは一部の資料に共通する特徴を見出すことが出来る。

また蔵元跡出土資料を始めとする石垣島の軒平瓦には、黒石川窯の軒平瓦に見られた c—6—II 及び設計、製作が c—6—II と共通する牡丹紋様以外の軒平瓦が多く見られる (図 6)。年代の根拠は乏しいが、黒石川窯以後に製作されたものだとすれば黒石川窯の軒瓦の設計、製作、デザインは以後石垣島の主流となったものと推察されよう。

これらの窯跡に文献史料から年代を与えると、湧田古窯、名蔵窯、黒石川窯の順に築かれたと解釈される。また名蔵窯は黒石川窯に統合されたものと考えられている (阿利 一九九二)。上述の近似性は文献史料の分析から見る窯の推移と合わせて考えることが出来そうである。窯を越えた特徴の伝播

は瓦工の移動によって生じたものと推察される。さらに各窯での諸特徴の変容は、技術を継承した在地の瓦工の創意やくせの表れと解釈出来、技術の在地化と解釈できる。『八重山島年来記』には島民へ造瓦法を伝授したという記事が見られ、傍証になるものと考えている。黒石川窯の軒瓦はもはや湧田古窯の軒瓦と共通する特徴は見出しにくい。黒石川窯の瓦には本島の資料には見られない石垣島の独自性が看取出来る。但し色調が赤色系で瓦当接合部裏面の粘土が薄いという葺き方に関する特徴の組み合わせ即ち瓦の設計は、湧田古窯以後に生産されたと考えられる本島の資料にも見られる。色調の変化は特に目に付く特徴だが、本島と石垣島とでそれぞれどう展開したかは判然としない。黒石川窯の軒瓦は赤色系ばかりであることから、一七世紀前半には石垣島で赤色系の瓦が生産されていたことが分かる。そして名蔵窯跡から軒丸瓦黒石川Aが出土している（石垣市教育委員会 二〇〇二）なら、石垣島では名蔵窯の操業期間中、文献に従えば一七世紀の末から一八世紀の前半までの間に生じている。「乾隆三年」と記された沖縄本島の赤色系の丸瓦に見る年代と近く、今後の検討課題といえるだろう。

湧田古窯から石垣島への瓦工の移動は何を背景にしているのだろうか。蔵元跡や名蔵窯表採の軒瓦には湧田古窯の軒瓦の中でも終末期ないし閉窯後と解釈される資料と共通点が見出せる。『球陽』には湧田古窯が一六八二年に壺屋へ統合されたと記述される。名蔵窯の開窯は『八重山島年来記』から一六九五年とされ十余年のずれがあるものの、発掘成果から湧田古窯は一六八二年以後も一部存続し

た可能性が提示されている（沖縄県教育庁文化課 一九九三）。大規模な窯であるが故に統合に手間取ったのかあるいは部分的な統合だったのかは定かでないが、沖縄本島の窯業が大きく編成されていく最中、壺屋へと移転しつつある湧田古窯から瓦工が石垣島へ渡って行った、すなわち瓦工の移動は沖縄本島の窯業大編成を背景とする可能性がある。だが確証を得るには両島の窯業における年代をもう少し詰める必要がある。また他の窯業製品の状況にも広く目を配る必要がある。

まとめ

考古資料、文献史料の分析から、湧田古窯から石垣島へ瓦工が招致され、湧田古窯の設計、製作、デザインを用いて石垣島の瓦生産が開始されたと考えられる。そしてこの瓦工の移動には沖縄本島の窯業大編成を背景とする可能性がある。湧田古窯の閉窯は壺屋への一元化というより、むしろ多元化だと解釈すべきであろう。石垣島に伝えられた湧田古窯の技術はやがて独自化し、黒石川窯以後は湧田古窯とはさらに異なる独自のものとなっていく。一方湧田古窯以後の本島の瓦とは設計の点で共通点も見られる。黒石川窯での変容は、湧田古窯以降の本島の瓦生産を究明する必要があるようだ。また黒石川窯以後の石垣島の軒瓦は黒石川窯で培われた設計、製作、デザインを踏襲していった可能性を述べた。一八世紀以降の両島の窯業技術がどう関わっていたのかは未だ検討の余地を残している

いえる。

本稿では琉球近世瓦の分析に終始したが、琉球の窯業を総括的に捉えるにはさらに他の資料へも目を向ける必要がある。八重山の古陶には「湧田や喜名（知花）や古我知に見まがう」ものがふくまれるという指摘がある（丹尾二〇〇七）。実際湧田古窯跡で出土する口縁形態の播鉢は石垣島に見られず、他の窯業製品全ての技術が湧田古窯から持ち込まれたと解釈することは出来ない。丹尾氏の指摘が事実なら石垣島の窯業は本島の複数の窯から様々な系統の技術者が集まって開始されたことになり、あるいは複数系統の混在という出発点が八重山における窯業の独自性を生み出す基盤となったのかもされない。その検証は今後の大きな課題である。さらに考古資料のみならず、文献史学を始めとする関連諸領域へも目を向けた、より多角的な検証が望まれる。

引用・参考文献

- 阿利直治 一九九二 「沖縄県石垣市山田平等窯址、慶田川窯址、黒石川窯址」『日本考古学年報43（一九九〇年度版）』：六三二—六三五、日本考古学協会編集
- 石井龍太 二〇〇六 a 「琉球近世瓦関係文献資料の集成と諸問題の検証…琉球近世瓦の研究」『よのつち 浦添市文化部紀要』第2号：一一—一九、浦添市教育委員会
- 二〇〇六 b 「琉球近世瓦当紋様の分類と編年試案…琉球近世瓦の研究その2」『東京大学考古学

研究室研究紀要』第二〇号…一〇九—一四八、東京大学考古学研究室

二〇〇六 c 「琉球近世瓦の分類と編年試案…琉球近世瓦の研究その3」『南島考古』第二十五号…

四一—四九、沖繩考古学会

二〇〇七 a 「八重山諸島における琉球近世瓦関係文献資料の集成と諸問題の検証…琉球近世瓦の研

究」『よのつち 浦添市文化部紀要』第3号…一一九、浦添市教育委員会

二〇〇七 b 「石垣島における琉球近世瓦の分類…琉球近世瓦の研究」『東京大学考古学研究室研究

紀要』第二一号…一三三—一四五、東京大学考古学研究室

二〇〇七 c 「湧田古窯の再評価…湧田古窯跡の軒丸瓦」『南島考古』第二六号…二七五—二八八、

沖繩考古学会

投稿中 「湧田古窯の再評価…湧田古窯跡の軒平瓦」『南島考古』、沖繩考古学会

池田榮史 二〇〇三 「第3部 近世く現代沖繩の考古学」『沖繩県史 各論編第二巻 考古』…四三九—五二〇、

財団法人沖繩県文化振興会編

上原静 一九九四 a 「首里城跡西のアザナ地区出土の明朝系瓦とその推移」『南島考古』第十四号…一五三—

一八六、沖繩考古学会

一九九四 b 「首里城城郭、西のアザナの調査」『文化課紀要』第一〇号…五七—八二、沖繩県教育庁

文化課

- 一九九八 a 「琉球の古瓦」『考古学ジャーナル』四二七・九一―二二、ニュー・サイエンス社
- 一九九八 b 「琉球諸島出土の中・近世瓦の研究略史」『地域文化論叢』第一号・七一―九六、沖縄国際大学大学院地域文化研究科
- 二〇〇〇 a 「古瓦から見た琉球列島の交流史」『古代文化』五二(三)・三九―四三、古代学協会
- 二〇〇〇 b 「沖縄諸島出土の古瓦と造瓦技術の伝播」『第9回アジア史学会研究大会(沖縄大会)報告講演・シンポジウムアジアの中の沖縄』一三七―一四八、アジア史学会 第9回研究大会(沖縄大会)編
- 二〇〇五 「八重山諸島の窯業史における屋瓦の特質」『南島文化』第二十七号・一〇九―一三三、沖縄国際大学南島文化研究所編
- 大川清 一九七八「二九六二」『琉球古瓦調査抄録』『沖縄文化財調査報告(一九五六―一九六二年)』三九〇―四一一、沖縄県教育庁監修
- 鎌倉芳太郎 一九七六『セレベス沖縄発掘古陶器』
- 金城弘 一九七五「瓦奉行所の組織について―王府のある生産機構をめぐって」『やちむん』第五号・二二五―二九、やちむん会
- 田辺泰 一九七二「一九三七」『琉球建築』座右宝刊行会
- 奈良国立文化財研究所 一九七四『奈良国立文化財研究所基準資料Ⅰ 瓦編Ⅰ解説』

宮城篤正 一九八九 「琉球の陶器 前近代」『沖縄美術全集一 陶芸』…一三二—一四五、沖縄タイムス社

丹尾安典 二〇〇七 「八重山古陶考」『八重山古陶—その風趣と気概—』展示図録…五—一二、早稲田大学回

會津八一記念博物館

やちむん会 一九七九 『やちむん会10周年記念「やちむん」特別号 図録沖縄の古窯』やちむん会編

〈報告書・資料紹介〉

石垣市教育委員会 一九九三 『黒石川（フーシナー）窯址発掘調査報告書 石垣貝塚発掘調査報告書』

一九九七 『歳元跡発掘調査報告』

二〇〇二 『展示会名歳瓦窯跡展』

沖縄県教育庁文化課 一九九三 『湧田古窯跡（Ⅰ）—県庁舎行政棟建設に係る発掘調査—』沖縄県教育委員会

一九九四 『湧田古窯跡（Ⅱ）—県庁舎議会議会棟建設に係る発掘調査—』沖縄県教育委員会

一九九五 『生産遺跡分布調査（Ⅰ）—県内生産遺跡分布調査報告』沖縄県教育委員会

一九九七 『湧田古窯跡（Ⅲ）—県庁舎警察棟建設に係る発掘調査—』沖縄県教育委員会

一九九九 『湧田古窯跡（Ⅳ）—県民広場地地下駐車場建設に係る発掘調査—』沖縄県教育

委員会

那覇市教育委員会 一九八六 『那覇市歴史地図—文化遺産悉皆調査報告書—』

注釈

(1) 筆者はかつて、一七〇九年に首里城が火災に見舞われて以後新たな瓦葺きの記事が減ることから、瓦の意味合いが変化した原因のひとつに防災機能への疑問が挙げられると考えていた(石井二〇〇六a)。しかし石垣島の史料から一九世紀に至るまで瓦に防火機能が期待され続けることが出来た(石井二〇〇七a)。琉球王国の瓦に対する姿勢は一七世紀後半以降一貫していたようである。